日本語と韓国語における否定辞の発達と分化に関する対照言語学的研究

守屋哲治*　　　堀江薫**
*金沢大学教育学部
**東北大学大学院国際文化研究科
moriya33@kenroku.kanazawa-u.ac.jp　　　khorie@mail.tains.tohoku.ac.jp

１． はじめに

韓国語では short form と long form の二種類の否定形式が併存しており、歴史的に見て古い short form は否定する述語の前に置かれ、新しい long form は否定する述語の後に置かれる。一方日本語では歴史的に見て、否定辞は交替しているもののいずれも否定する述語の後に置かれている。このことは否定辞が述語の前にまずおかれ、その後、述語の後に否定を補強するために使われる語がもとの否定辞にとって変わるという、否定の循環的発達を主張する Jespersen's cycle(Jespersen 1917)の考え方が韓国語にはあてはまるが日本語には当てはまらないことを示唆している。このような事実に基づいて、本発表では、文否定の否定辞が副詞的機能を持つ言語では当該言語の文法構造から受ける制約が比較的少なく Jespersen's cycle のような発達が見られやすいのに対して、助動詞として発達する言語では当該言語の制約を受けやすいため循環的発達が見られにくいことを主張する。

２． Jespersen's Cycle

Jespersen(1917)は、印欧語族の言語の否定発達に関して、循環的な発達プロセスを仮定している。それによれば、否定辞は最初に文頭に表れ、否定の意図をはっきり示すが、時と共に発音が弱化していき、否定の意図を明示する他の語を補強として必要とする。そして、元の否定辞が消滅して補強として働いていた語が独立した否定辞として機能するようになる。この否定辞がまた弱化していき、同じプロセスが循環的に起こっていくというものである。英語の例を以下に示す(例文はHorn(1989:455)より)：

(1) a. Ic　ne　secge.
　　　I　NEG　say
　b. Ic　ne　seye not
　　　I　NEG say NEG
　c.　I　say　not

(1a)は古英語の例で、否定辞neが動詞の前に来ているが、(1b)の中英語では動詞の後ろの位置に否定を補強するnotが登場している。さらに初期近代英語(1c)では動詞の前位置の否定辞が消滅し、中英語では補強の役割を果たしていた否定辞が独立した否定辞として機能している。他のゲルマン語もほぼ同じような発達をしているが、英語の場合はさらに I do not sayのように助動詞の助けを借りて本動詞の前に否定が出てきており、助動詞との縮約によって弱化が起こっている。

Jespersen(1917)では、このような現象が起こる原因が、否定が機能的にはきわめて重要であるのに対し、形態的には述部などに従属する形になるため、機能面と形態面の位置づけに食い違いが生じているためとしており、普遍的・概念的な説明をしているが、実際に取り上げている言語は英語およびラテン語・フランス語などであり、実際にこのような現象がどこまで普遍的なのか、という点に関する言及はない。

次節では韓国語の文否定を観察し、この言語ではJespersen's cycleと言える変化が起こっている可能性があることを論じる。

３． 韓国語の否定辞

韓国語には、文否定の形式としてci anh-ta (以下long form)とan-ta (以下short form)の二種類の形式が併存している：

(2) a.　*ape-nim*　*-un*　***an***　***ka****-sy-e*.
　　father-HT　-TC　not　go-SH-INT
　　'Father is not going.'　(short form)

b. *ape-nim*　*-un*　***ka-ci (lul/to)***
　father-HT　-TC　go-NOM (AC/even)

　*a**nh**-usy-e*.[1]
　not-SH-INT
　'Father is not (even) going.' (long form)
　　　　　　　　　Sohn (1999: 390)

ほとんどの場合、どちらの形を用いることも可能であるが、一方のみが容認可能な場合がある。そのほとんどの場合において、long formの

みが可能である。その例として、以下のようなケースが挙げられる：

(3) a. *kang-i mos el-ess-ta.
river-NOM NEG freeze-PST-DECL

b. kang-i el-ci mos ha-yess-ta.
river-NOM freeze-COMPNEG PST-DECL
'The river could not freeze.'
J-B. Kim (2000: 30)

この例は、能力の否定を表す形態素mosが状態動詞や形容詞を否定する場合に、short formが使えず、long formでしか使えないことを示している。このような制約の大きさの違いは、韓国語の否定辞がshort formからlong formへと移行している途中であるということを示唆していると考えられる。H-O.A.Kim(1977)では、以下のように、歴史的な資料の分布からこのような発達段階があることを主張している：

(4) Negative constructions found in fork songs of the ancient Silla (4th century－9th century) and early Koryo (9th century － 10th century) were examined. No occurrence of Type Ⅱ(=long form) is noted in the data..... Type Ⅱnegation, however, increases its frequency roughly 20% by the time of 16th century.
H-O. A Kim (1977: 674-5)

そして、このような発達がJespersen's cycleと同じ動機を持つものではないかと考えている：

(5) By placing the negative element postverbally with the emphatic auxiliary *ha*, the long form negation is "seemingly motivated to intensify the negative component". H-O. A Kim (1977: 680)

このように歴史的に見ると韓国語の文否定の形式はshort formからlong formへと移行していると考えられるが、共時的には二つの否定形式が併存していて、iconicな原則に基づいた役割分担が見られる(Moriya and Horie 2003, 堀江・近藤・姜・守屋2004). 次節では、文法的に韓国語との類似点が多いとされる日本語においては、文否定の形式の発達においてJespersen's cycleに類するような現象が観察されないことを見ていく。

４．日本語の否定辞

現代日本語の文否定は、助動詞「ない」を述部に付加することによって作られる。英語や韓国語では否定辞は文法的には副詞の一種と考えられるが、日本語の「ない」は述部に後続し、それ自体の活用を持つことから助動詞と分類されている。日本語はSOV言語であるため、否定の意味を補強する副詞などはすべて否定辞の左側に生起することになる：

(6) a. 一円も持っていない。
b. この本はちっとも面白くない。
c. 誰も事件の真相を知らない。

このような特徴は、日本語の歴史をさかのぼっても変わることはない。否定辞「ない」は比較的新しく、「ず」、「ぬ」、「ざり」、「ん」などの形式が否定の助動詞として用いられて現在に至っているが、いずれも述部に付加される形で機能しており、この点で歴史的に変化はない（佐藤 1995: 126, 142）：

(7) a. ほととぎす、今鳴かずして明日越えむ山に鳴くとも験あらめやも （万葉集, 4052）
b. 山高み人もすさめぬ桜花いたくなわびそ我見はやさむ （古今集, 50）
c. はじめより、おしなべて上宮仕し給ふべき際にはあらざりき
（源氏物語、桐壺）
d. そんなことは出来ん。（現代語、関西方言）

このように日本語の否定辞はJespersen's cycleのような変遷を辿っているということはできない。いわゆる係り結びの現象は、副詞と助動詞の呼応現象であり、韓国語に見られるような否定辞の位置の明確な変化ととることはできない。

５．日本語と韓国語の対照

前節までで、韓国語の否定辞発達ではJespersen's cycle に匹敵するような変遷がたどれるのに対して、日本語では否定辞は一貫して助動詞として働いており、そのメンバーが入れ替わっているというだけであることを見てきた。

日本語と韓国語は共にSOV言語であり、文法的に非常に類似した点を持つ言語であるにもかかわらず、なぜこのような対比が起こるのであろうか。本稿ではこの問題を解く鍵は、否定辞の品詞性の違いにあると考える。先に見たとおり、韓国語の否定辞は副詞的に述語を修飾しており、それ自体が時制などによって活用することはないのに対し、日本語の否定辞は時制などによって活用する助動詞であるという違いがある。

古田(1984: 159)などでも指摘されているこ

とであるが、西洋語では否定が副詞で表される傾向が強い。Jespersenが英語、ラテン語、フランス語などの否定の発達からJespersen's cycleのような否定の循環的発達を考えついた背景には、このような背景があるのではないだろうか。すなわち、Jespersen's cyleというのは否定辞が比較的語順の制約を受けにくい副詞として機能している言語で見られる現象であり、否定辞が、語順などの制約をより厳しく受ける助動詞として機能している言語では循環的発達が見られにくいという予測を立てることができる。Jespersenが想定しているような、否定の機能的重要性と形態的従属性の乖離という状態は、否定辞が文法的には随意的な要素として具現している場合にのみ起こるものだと考えられるのである。助動詞として否定辞が機能している場合には文法的な義務性が高いために、意味を補強するための副詞などが起こってもそれら自体が新たな否定辞になることはないものと考えられる。

比較的文法構造が似ている日本語と韓国語の間で否定辞の機能に関してこのような違いがあるということは、否定辞がどのような機能をその言語で担うようになるか、ということは、基本的には言語の類型的特徴の類似性とは独立したものである。次節では、韓国語と極めて近い類型的特徴を持ったアルタイ言語の否定辞をとりあげ、実際に否定辞の機能が韓国語とは異なることを見る。

６．アルタイ語族内でのバリエーション

韓国語はアルタイ語族の諸言語と極めて近い形態･統語的特徴を持っている。特に膠着型言語としての形態類型論的特徴や母音調和などの音韻的特徴に照らすと、韓国語は日本語よりもアルタイ諸語への類似性がより高い。本研究で対象としている否定形式に関して興味深いことは、アルタイ語族内部でも、否定辞の働き方が言語によって異なるという点である。

(8) a. *Gel-**me**-yecek*
come-NEG-FUTURE
'(S)he will not come.'
Schaaik (1994: 38)

b .*Bi* ***alba**-m*
I NEG.ABILITY.NON-FUTURE-1sg

ichet-che-mi
watch-IMPERFECTIVE-CONDITIONAL
'I could not watch it.'
Nedyalkov (1994: 33)

(8a)はトルコ語、(8b)はイヴェンキ語の否定文の例である。両言語はいずれもアルタイ語族に属するが、トルコ語では否定辞が述語に後続する、屈折的な機能を持っているのに対し、イヴェンキ語では否定辞が述部の前に置かれている。イヴェンキ語の否定辞は語順的には韓国語と同じであるが、時制などの屈折を持つ点で助動詞的であり、この点は日本語と同じである。

これらの言語においては否定辞は文法的な義務性が高い機能を有しているためにJespersen's cycleのような現象が見られないことが予測される。実際、両言語ともに韓国語のような、二種類の文否定の形式が共存するというようなことは見られない。

７．おわりに

日本語と韓国語は文法的に極めて類似した特徴を持つ言語であるが、否定辞の発達過程に関しては大きな違いがあることを見た。韓国語は英語などと同様、否定辞が副詞として機能しているので、Jespersen's cycleのような発達過程を辿って来ていると考えられるのに対し、日本語の場合は、否定辞が助動詞として機能しているので、Jespersen's cycleのような循環的発達は見られず、一貫して述語に後続する位置を占めていると考えられる。

また、否定辞が副詞として機能するか、助動詞として機能するかは、基本語順や語族といった要素とのはっきりとした相関は見てとれない。実際に日韓語と非常に近い類型論的特徴を有するアルタイ語族の中でも副詞として機能する場合と助動詞として機能する場合があることを見た。

言語の歴史的変化の一般性を議論する場合に、ともすると法則の一般性を重視するあまり、個別言語によるバリエーションが考慮に入りにくいことがあるが、一般的な法則が当てはまる言語と当てはまらない言語との間にはどのような要因の違いがあるのかを検討していくことによって、よりきめの細かい言語変化の一般性をとらえていくことができるのではないかと考える。

謝辞
本研究は、21 世紀ＣＯＥプログラム「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」(http://www.lbc21.jp/)および日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号 16520234）による補助を受けて行われています。

注

1. グロスに用いた略号の意味は以下の通りである。AC: Accusative particle, COMP: Complementizer, DECL: Declarative, HT: Honorific title, INT: Intimate speech level suffix, NEG: Negation, NOM: Nominalizer suffix,

PST: Past, SH: Subject honorific suffix, TC: Topic-contrast particle.

参考文献

Bybee, Joan. 1988. “Semantic substance vs. contrast in the development of grammatical meaning.” *Proceedings of the Fourteenth Annual Meeting of Berkeley Linguistics Society*, 247-264.

Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: The University of Chicago Press.

古田啓. 1984. 「西洋文典と助辞」鈴木一彦、林巨樹編『研究資料日本文法⑥　助辞編（二）助動詞』, 157-177. 東京：明治書院.

堀江薫、近藤絵美、姜奉植、守屋哲治. 2004. 「関西方言の否定形式交替現象に関する認知言語学的研究：韓国語　との対照に基づいて」佐藤滋、堀江薫、中村渉編『対照言語学の新展開』, 319-331, 東京：ひつじ書房

Horn, Laurence. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: University of Chicago Press.

Jespersen, Otto. 1917. *Negation in English and Other Languages*. Copenhagen: A.F. Høst.

Kim, Hyun-Oak Alan. 1977. “The Role of Word Order in Syntactic Change : Sentence-Final Prominency in Korean Negation,” *Proceedings of the Third Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 670-684, Berkeley, California: Berkeley Linguistic Society.

Kim, Boomee. 1991. “The Acquisition of the Two Negation Forms in Korean,” *Harvard Studies in Korean Linguistics* Ⅳ, 13-25. Seoul: Hanshin.

Kim, Jong-Bok. 2000. *The Grammar of Negation: A Constrained Based Approach*. Stanford: CSLI.

Moriya, Tetsuharu and Kaoru Horie. 2003. "On the Coexistence of Two Forms of Sentence Negation in Korean: A Functional Typological Perspective." Gregory K. Iverson and Sang-Cheol Ahn (eds.) *Explorations in Korean Language and Linguistics,* 459-469. Seoul: Hankook Publishing.

Nedyalkov, Igor. 1994. “Evenki.” In Peter Kahrel and René van den Berg eds. *Typological Studies in Negation*, 1-34. Amsterdam: John Benjamins

佐藤武義編　1995.『概説日本語の歴史』　東京：朝倉書店.

Schaaik, Gerjan van. 1994. “Turkish.” In Peter Kahrel and René van den Berg eds. *Typological Studies in Negation*, 35-50. Amsterdam: John Benjamins.

Sohn, Ho-min. 1999. *The Korean Language.* Cambridge: Cambridge University Press.

Traugott, Elizabeth Cloth , and Bernd Heine, eds. 1991. *Approaches to Grammaticalization*. 2 vols. Amsterdam: Benjamins.

Traugott, Elizabeth Cloth, and Ekkehard König. 1991. “The semantics-pragmatics of grammaticalization revisited.” In Traugott and Heine . 1991, vol. 1: 189-218..